
同じ世界の勇者と見習い魔法士

希望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同じ世界の勇者と見習い魔法士

【Nコード】

N9051Y

【作者名】

希望

【あらすじ】

セーヴル大公国は日々、魔族と呼ばれる獰猛な種族による侵攻危機に脅かされていた。そんな中でついに耐えかねた皇帝が紡いだ言葉は———異世界からの『勇者召喚』。その言葉を聞いたある魔法士の見習いは驚愕する。何故なら彼女は、異世界トリップを現在進行形で経験中の日本人なのだから。主人公の兵藤凜は基本厄介事嫌いの現実主義者。同族に会えたことは嬉しいが、勇者には関わらず元の世界に帰る方法を探そうと思ったところに勇者からありがたくない一言。「一緒に魔族退治をしてくれないか？」いえ、全力で

お断りです。――最強チートなドS勇者と異世界トリップ中の見
習い少女の織り成す異世界恋愛ファンタジー。

第一話：見習いは異世界人（前書き）

2作目の投稿になりました。
読んでいただけると幸いです。

第一話：見習いは異世界人

「—————勇者を召喚しようと思う」

端が見えない程の広い空間に響き渡る静かな声。

発するのはセーヴル大公国の頂点に君臨する皇帝。

30代なのに20代と思えるほどの若々しい美貌に威圧感を纏わせる冷酷非情の王。

そんな彼がいる国は近年魔族による侵攻が始まっていた。

魔族とは人間よりも遥かに優れた身体能力を持つ獰猛な種族だ。

そのため、当時は侵攻が始まると共に3日で陥落すると国の誰もが絶望に打ちひしかれていた。

しかし予想に反して皇帝率いる親衛隊が現在まで死闘を繰り広げ、国を守っている。

皇帝自ら先陣を切り、魔族をなぎ倒しているそうだ。

けれど皇帝はそろそろ限界と感じたのだろう。

魔族と唯一渡り合えるとされる『勇者』を頼った。

「……このまま陥落するのも時間の問題だ。ならば賭けてみるのも良いかもしれん」

紡がれた言葉にこの場の全員が息を呑む。

『勇者召喚』は大量の魔力を消費して行う魔法。多量に魔力を持つ生贄を数人犠牲としなければならない。

その上、勇者の意思を無視しての強制召喚だから極悪魔法といって過言ではない。

「もう時間が無い…。勇者の召喚は満月の満ちる今宵の晩、おこなう！至急準備せよ！」

皇帝が玉座を去ると、周りが慌てて動き始める。
急すぎる事態に対しても準備を間に合わせようとする彼らの精神は立派だと思う。

（さて：私も哀れな勇者の召喚のために準備をしましうかね…）

私は周りの動きに合わせて準備をし始める。

あ、紹介が遅れてしまいましたね。私の名前は兵藤凜ひょうていりんと言います。

勘の良い方ならお気づきかもしれません。そう、私はれっきとした純日本人です。

そんな私が何故こんなファンタジー溢れる世界に違和感無く存在しているのかと言われますと色々あったのですよ。

まあ、詳しい話はまた後日にして簡単に説明しますと異世界トリックです。

精神科医を紹介してやろうとか思わないで下さい。大丈夫です、頭はイっちゃってませんから。

いえ、正直馬鹿な話だと思ってましたよ。異世界舐めてました。気づいたら環境にとっても優しそうな緑溢れる草原で寝転がっていました。

あれですかね、基本現実主義で日頃から異世界を馬鹿に思ってたからですか？

とにかく私は軽くパニック状態に陥り、命懸けで生活を確保して現在魔法士見習いをやっております。

もちろん元の世界に帰るための方法探しです。

ですから勇者召喚でお仲間降臨はとっても嬉しいのですよ。

勇者という肩書きでの登場は少し哀れに思いますが。

だって勇者なんて聞こえがいいだけの奴隷みたいなものですから。

「リン！お前は何をしているんだ。早く準備を始めろ！」

思わずビクリと心臓が跳ね上がる。
恐る恐る後ろを振り返ればご立腹なご様子の我が師匠、ガウス様。
黒い髭をもつさりと生やす50代、威圧感ハンパない。
敵に回したくない人と逆らえない人ナンバーワンを魔法士の中で誇る強者です。

頼み込んで弟子にして貰いました。

「いやいや、今からしようと思ってましたよ」

「ほう。さっきからずっと見ていたが動く気配が無かったぞ」

「師匠、気配を殺すって卑怯だと思いませんか？」

「むしろ爽快だと感じるな。相手の驚く顔が見れる」

「いやあ、ドSもそこまでいくといっそ清々しいですね」

「褒め言葉として受け取られるか皮肉として受け取られるか、選べ」

「遠慮しておきます。今の言葉はお忘れ下さい」

異世界に来て半年、世を渡るための処世術を学びました。

『笑顔は最強の武器』

大抵は笑顔を作っておけば世を渡れます。

私もチャレンジしてますよ。通じない相手に。

「さっさと準備をしろ。神殿の掃除と聖水の調達、終わったら話がある」

はい、死刑宣告を受けた気分です。

話ってあれですか、あの地獄の数日間の再来ですか？

魔法士としての基礎を寝ずに叩き込まれたスパルタの日々が頭をよぎる。

おかげで初級魔法をマスター、でももうやりたくない。

「はーい」

笑顔を頑張って貼り付けたまま、神殿へと向かう。

神殿は皇帝の住む城のすぐ隣にある純白に輝く建物。

壁には汚れどころか塵1つ付いていなくて輝きを放っている。

私はわざわざ裏に回って裏口から中へと入る。下っ端の私が正面から入ったら打ち首です。

神殿の中はとっても冷えていて寒い。壁の素材が大理石に近いものらしく、冬の今は神殿自体から寒さが放たれている感じである。

白い息が吐き出され、腕をさする。

（さ、寒い！コートが欲しいよ…。こんな布切れでこの寒さを乗り切れと！？）

視線を下に向け、自らの服装を見る。

ぺらぺらの布地がワンピースのような形に加工されているだけの布切れ。もちろん断熱加工や防寒などは一切してない。

ふと腰まである髪の毛が視界に入る。この国では珍しい黒髪をわざわざ一般的な茶色に染めてある。

瞳も黒は見世物にされるほどだという事を知って、偶然にもポケットに入っていたカラーコンタクトで緑色に変えた。

お姉ちゃんから未使用で貰ったカラーコンタクトを出すのを忘れてて入れっぱなしにしておいて良かった。見世物なんて嫌だし。

私は体を振って寒さを紛らわすと、掃除をし始める。

掃除は簡単。初級魔法の『風』^{ウィンド}を使って埃とゴミを集めて捨てるだけ。

指をくるくる回して、掃除を終えると次は聖水を汲みに奥へと向かった。

ちなみに聖水とはぶっちゃけると只の水だと思う。ミネラルウォーターのような水。

この人達は崇めてるけど只の水でしょうがとツツコミたくなる。神殿の奥には聖水が溜めてある井戸があり、傍にある水瓶で汲む。中々の重量なので毎回息を切らしてしまう。

汲み終わると、さっきの場所に戻って水瓶を入り口近くに置いておく。後は放置だ。

（よし：終わった……と。師匠のそこ戻って死刑宣告を受けよう。どうせ逃げられないし）

足取りが重くなるのを感じながら、ガウスの部屋に向かう。

ガウスは、国でも高位の魔法士であり神殿を取り仕切る祭司長でもあるため城で部屋を与えられている。

基本はそこにいるので探す手間が無いのだ。

「失礼しまゝす」

ノックも無しに入るのはこちらの常識。私も抵抗は感じるものものやっています。

扉を開けて入ると案の定、ガウスが机で書類仕事をしている。

「ああ、来たか。話がある、座れ」

ガウスは顔を上げると、中級魔法の『テレキネシス念力』で片付けてあった椅子を用意する。

私は大人しく座って死刑宣告を待つ。気分は裁判所。

出来れば食事と睡眠をつけて貰いたいと叶わぬ願いを抱いてスパルタ修行を思い出す。

「今日の勇者召喚の事なんだがお前が参列しろ」

ずるりと椅子から転げ落ちる。

何ということだ、身構えて損をした。

一先ず死刑宣告の話では無いことに安堵を覚えたのも束の間、今の人は何と言った？

「すみません、今何と？」

ワンモアプリーズ。

「だからお前が勇者召喚に立ち会え、高度な魔法を見れば良い修行になると思ってな」

「ちなみに本音は？」

「私は面倒くさいから立ち会わん。代わりにお前を行かせる事で休みを貰った」

「鬼、馬鹿。ドS悪魔」

「何とでも言え。今日は大事な娘と会う日なんだ、」

口元に笑いを浮かべて話すガウスに殺意を覚えるのは何回目だろうか。

よりによって私に勇者召喚に立ち会えだど？

断言しよう、絶対爆笑する。

目の前で勇者様とか言われる同族を見るわけですよ。日本人しかも素で。笑う場面でない場所で爆笑したら絶対最悪でしょ。確実に国を追われる。

ここは仮病を使って休むか？

いや、仮病なんてすぐばれる。特に目の前の人は騙せない、今日は更に娘さんも絡んでるから。

ガウスは20代の娘に溺愛する危ないお父さんなのだ。

最近、結婚して離れて住むことになり凶暴化が進んだ。

ちなみに娘さんとはとても美人で嫁ぎ先が公爵家。貴族の中でトッ

プに位置する。

ガウスは伯爵家なので大出世だった。

「くっ…分かりました。引き受けます」

結局は折れるしかないのだ。仮にもガウスは師匠であり地位もある。そんな人に逆らえるわけが無い。

「そうか、じゃあ私は帰るから後は頼んだ。勇者召喚の参列者マニュアルを机に置いておくから頭に入れておけ。それと服装は神官服が正装だ、そこに新品があるから着替えておけよ。じゃあな」

何だ、この手際の良さは。

とゆうか勇者召喚の参列者マニュアルって何ですか。

異世界にそんなマニュアル存在するんだ。

私は立ち去るガウスを見送った後に、しぶしぶ分厚いマニュアル本を掴みパラリとめくり始める。

『勇者を利用して平和を掴もう、勇者攻略100の方法』

私はパタリと本を閉じて深呼吸をする。

うん、今のは見間違いだ。きつと疲れてるんだ。

だっておかしい、救世主に対しておもっきし利用という文字。

私はもう一度本の表紙をめくる。

うん、書いてあるのは同じ文字だ。良かった、私の目がおかしくなったわけじゃ無くて。

っていやいや良くない何も良くないよ！

私は現実主義者のはずがいつの間にか現実逃避に走っていたらしいです。

今だけは現実を逃避したい気分です。と言う事で私は何も見ません

でした。

壁に掛けてある新品の服を持ってガウスの部屋から出ると、自分の部屋のある地下へと向かう。

下っ端の部屋は地上ですら無いのがとても悲しいです。

重たい本と汚れを付けてはいけない服が私の心をどんどん重くしていくのが分かる。

夜まではもう少し。月はもう満ち始めているころだろう。

私は地下へと続く階段を下りて奥にある自分の部屋へと辿り着く。

扉を開けて中に入れば、灰色の壁に薄汚れたベッドという質素すぎる4畳の見慣れた空間。

夜までもう時間が無いので、急いで新品の服に着替える。

着方はスパルタで叩き込まれたからマスターしている。着終えた後に残る感想は———ぶかぶか。

サイズが合わなくて裾を引きずる形となっている。この服は元はガウスのために用意されたもので当然といえば当然なのだが。

ふと、『刻量』と呼ばれる時計のような役割を果たすものを見れば夜はもうすぐそこまで迫っていた。

慌てて本を服の中に入れて、勇者召喚の行われる神殿の『光臨の間』へと向かう。

引きずる裾は汚れていく気がするが構ってられない！

遅れたら真っ先に眼に浮かぶのはガウスの怒りと国からの視線だ！息を切らしながら神殿に着いて、中に入る。

まだ始まってはいないらしく、人は居るものの慌しく動いてるだけだった。

そんな中、私に近づいてくる慌しい人影が見えた。

「お、リン。お前も参加すんのか」

「ミリー。神官服ってことはミリーも？」

「もちろん。俺はこうゆうのには人一倍興味があんだよ」

このミリーは喋り方こそ男のようだが、れっきとした女性であり強気系の美人だ。

私と同期で魔法士見習いになったが、すでに彼女は魔法士となって立派に活躍している。

天才的な魔法センスと、美しい美貌によって求婚は日々耐えないという贅沢な悩みを持っている。

「私は師匠に押し付けられたんだって。早く帰りたいのが本音だし」

「まあまあ、見てて損はねえって！ 楽しめよ」

「はいはい」

手を振って去っていくミリーは男に呼ばれていた。

あれは皇帝の長男であるレオン殿下であり、皇帝に負けず劣らずの美貌の持ち主。

二人は恋人同士という噂が流れてはいたが、どうやら真実だったようだ。

私はもうすぐ始まる召喚に備えて、心の準備をしていた。むろん笑わないように。

そして始まりの合図、皇帝のお出ましだ。

「これより伝説の戦士を異世界より呼び寄せる！」

凜と響く声に先程までの喧騒が嘘のように静まり返る。

皇帝の声と共に、端にいた祭司長方が前に出る。

祭司長方が中央に集まり、杖で魔方陣を描き始める。

それでも魔法士の基礎は叩き込まれたから分かる。高度な魔方陣でとても真似が出来そうにない。

私は思わず息を呑み、魔方陣の出来に惚れ惚れとしてしまう。

「—————異世界より現れし救世主の御霊よ。今宵、危機に陥ら

んとする我が国を救う新たな救世主の召喚を我は願う。現れろ、数多の戦を勝ち抜いてきた異世界の勇者よ!!」

皇帝の叫ぶ声に力が入るその瞬間、魔方陣が強く輝いた。

眼を閉じてしまうほどの強い光に私はたじろぐ。数秒くらい続くと、光はゆっくりと収まった。

その場を静寂が包む。成功？それとも失敗？

眼を開ける前に轟いた歓声がその答えだろう。開ければ、魔方陣の上に青年の姿が見えた。

17歳位だろうか、私よりも年上そうならりとした顔つきは端整に整っている。白い肌とは対照的な黒い髪と黒い瞳は私の持っていた『色』。

何よりも日本人である事を証明するその色は、私を喜ばせた。

(同族――――!!)

相手側にとってはいきなりの事態に混乱してこんな風に思われるのは迷惑かもしれないがとにかく嬉しいぞ！

しかしよくよく見ると青年は物凄い美形顔だった。切れ長な瞳がクールだ。

いかにもな勇者オーラが出ているようである。

「ここは……？」

驚きと戸惑いの混じる声。懐かしい、私もここに来て初めて発した言葉がそれだったよ。

「我が召喚に応じてくれて礼を言おう、勇者よ。ここは、君にとっての異世界だ」

「……は？」

「受け入れられないのも無理は無いだろうが、君には勇者として我が国を救ってもらいたいのだ」

「いや、あのちよつと…」

「ああ、いきなり事が起こり疲れているのだな？ 今、部屋へ案内させる。詳しいことは明日にしよう」

「え、あ…ちよ。はあああ！！？」

皇帝の『勝手に話を進める』攻撃には同情するよ、勇者。
あれはカウンター攻撃が入られない最強技だよ。

「案内は……………ん？」

—————今、目が合ったのはきつと気のせいだよ。皇帝様が私なんかを視界に入れてくださるなんて勘違いも甚だしいな。
うん、下を向いておこう。

「おい、その君」

皇帝の声が誰かに向けられて発せられる。
私はきよろきよると辺りを見回してその誰かを探してみる。

「君だ、裾を引きずってる」

おっかしいな、裾は引きずるものじゃないよ。
誰だ、身の丈に合わない服なんか着てるのは？

「隣の君達、その子に教えてあげてくれ」

皇帝が溜め息をつくとき、私の隣にいる神官二人が私の袖を掴んで前に引っ張る。

ちよちよちよい！！

ペイっと皇帝の前に放り投げられた私は冷や汗ものですよ。

「丁度いい、勇者と同じ年頃だろう。勇者を客室に案内してやってくれ」

ええ確かに私は15歳ですよ。ですが同じじゃ無いです。女性の年齢を大雑把に見るのはいけないことですよ。

それでも高年齢ばかりで構成されている神官の中では確かに同じくらいですね。

私を選ぶ理由は十分ありますね。正直、面倒くさいので嫌ですが皇帝にそんな事言えば公開処刑間違いないし。

「…分かりました」

逆らえるなんて奇跡が起きるわけがありません。

私は、皇帝の先にいる勇者に視線を向けました。同族

私も異世界人だとばれれば厄介事間違いないし。ばれないように極自然にこちらの世界の住人を装いましょう。

いざ、勝負！！

第一話：見習いは異世界人（後書き）

よかったら次回もお立ち寄り下さい。
感想お待ちします。

第二話：勇者は化け物（前書き）

タイトルが少し物騒になってしまいましたが、流血表現などはありません。

第二話：勇者は化け物

「えっと……。初めましてー、勇者様？」

皇帝から案内という形で神殿から出た私と勇者の間に流るるのはひたすらに長い沈黙。

とりあえず勇気を振り絞って話しかけてみましたよ。挨拶は日本人として当然です。

けれど同じ日本人であるはずの勇者からは反応が一切返ってきません。どっかでしくったつけ？

勇者は険しいお顔をして下を向くのみ。あーさすがに状況整理の時間はあげた方がいいよね。

「……ここはどこなんだ？俺は学校の帰り道にいた筈なんだが……」

なるほど、だから服装が制服なんですね。青いブレザーとはかつこいいい。

それにしても青いブレザーって私の知ってる超有名な進学校のものと似てるなあ。

偏差値80を超えてるとか一般人に喧嘩を売ってるとしか思えないよ。

「ここは勇者様から見て異世界ですよ。近年我がセーヴル大公国は魔族の脅威に晒されており、非常に不味い状態なのです。ですから最後の頼みの綱として貴方が召喚されました」

よし、噛まずに言えた！

服の中に入れておいた本の1ページ目を見ながら言い切る。

勇者は私の後ろをついて来ているといった感じなので本を見ている

ことは多分ばれていないと思う。

「それって……俺にこの世界を救ってことか？」

「平たく言えばそうゆうことです。意思を無視されて強制的に召喚された上にこちら側の問題を押し付けてしまつて申し訳ないと思つています」

「本当に……その通りだな。俺は元の世界には帰れないのか？」

私は進める足をピタリと止める。

結論から言うならまず帰れない。帰れるなら私は今ここにはいない。けれど勇者マニュアルでは、帰れますと明記してある。こうやって書いてある意図なんていくらなんでも分かつてしまう。

勇者の協力を失わないためだ。帰れないと言えば勇者は怒り、協力はなくなってしまうだろう。

しかしまだ帰れると分かるならば帰す事を条件に魔族討伐の協力を仰ぐことが出来るからだ。

さて、どちらを選ぶうか。個人的には帰れませんよと真実を告げてあげたい。

けど告げたら告げたで後々厄介だ。ここは日本人特有の曖昧作戦を貫こう。

「……私は一介の下っ端ですからそのような事は存じ上げません」

後ろを振り返り、半年間培ってきた笑顔を勇者に向ける。

勇者は、目を見開いた後に眉を寄せて怪訝そうな顔を見せた。美形だから一枚の絵画に書かれた一種の表情のように思える。

「そうか……。じゃあいい」

「そうですか。ではお部屋に着きましたのでお入り下さい」

私が足を止めた横にある部屋は国賓VIP専用の部屋。

未だに一回も中に入ったことが無い部屋に入るのは勇気が入る。

私は、震える手で扉を開き勇者を中へと促す。

勇者は躊躇いも無く中へ入った。

「今晚はこちらでお休みを。何か御用がございましたらそこら辺でうろうろしている女官に声をおかけ下さい。ただし部屋を出ないで下さいね」

「分かった。……なあ、まだ質問があるんだがいいか？」

「答えられる範囲でならよろしいですよ」

「もしもの話だが逃亡を図ればどうなる？」

私は一瞬固まってしまった。まさか勇者から見て異世界人である私に堂々とそんな事を聞くとは思わなかった。

鎌をかけてるのか、それとも只の馬鹿なのか。

どちらにせよ、様々な驚嘆事実にも動じなかった私を驚かせたんだ。褒めてあげましょう。

「…そうなってしまえばこの国が終わるだけです。最も、この国の人はそんな気がさらさら無いようですが」

「どうゆう意味だ？」

「気づいていませんでしたか。勇者様の体には、束縛魔法が施されています」

「束縛……！？ 奴隷かよ…」

「まあ、救世主に対してのおもてなしとは言えませんがこちらに召喚された際に自動的にかかる仕組みだったようですに手遅れですね。もう解けない位まで魔法が進行しています」

「それじゃ……」

「はい、勇者様はこの国を救うしかここで生きていく方法が無いという事です」

終始笑顔のまま会話を続けた。

勇者は流石に堪えたようで顔に翳りを見せた。束縛魔法というのは本当だった。勇者を召喚するために作られた魔法陣の中には束縛魔法と追跡魔法の混合魔法の術式が組み込まれていた。

私もこれには同情する。

これじゃ本当の奴隷となっている。

「それではこれで失礼します。明日からこの国を救うために頑張ってください」

私は扉を閉めようとドアノブに手を掛けると、勇者の手がずっと伸びてきて私のドアノブに掛ける腕を掴んだ。

勇者の方を見ると何か言いたげな顔をしていた。

「何ですか？」

「…まるで他人事なんだな」

「……はい？」

「だから、この国の事。君はこの国の人だろ、なのにもうでこの国がどうなってもいいって言ってるような口ぶりだ」

いやあ、他人事ですから。

しくったな、墓穴掘った。もうちょいこの国を思わなきゃいけないかったようです。

「…そんな事ありませんよ。私だって、魔族の侵攻に平静を装うことが精一杯なんですから…」

肩を小さく震わせて、下を俯く。

勇者は慌てて謝ってきた。

悪いね、これもここで生きてくために学んだ事なんだよ。

私はさりげなく勇者の腕を外して、俯きながら扉を閉めて廊下に出た。

（中々勘の鋭い勇者だったな。けど詰めが甘い。あれだけの演技でころっと騙されるなんて）

服の中に入れておいた勇者マニュアルを取り出す。

勇者マニュアルを初級魔法『火』^{ファイア}で燃やすと、廊下の窓から捨てた。

勇者とはもう関わらないようにしよう。

隠し通せる自信はあるけど何よりも厄介事を運びそうなタイプだね、あれは。

私は私で元の世界に帰る方法を探しますか。勇者召喚の魔方陣を調べれば何か分かるかな？

廊下を歩く足をふと止めると、窓から星を見上げる。

日本とは違って、輝かんばかりの星が無数に見える。

初めの頃はただ綺麗だと感じていたが、いつの間にかここが私のいるべき所ではないという事を示しているような戒めに感じてしまっていた。

私は星を睨みつけてから再び歩き出して、自分の部屋へと向かった。部屋に入ると着ているぶかぶかの神官服を脱ぎ捨てて、ベッドの下にある新しい服を取り出す。

冬用に作っておいた自作のワンピースであり、中に綿を詰めておいたので暖かい。

けどこれはあくまで部屋着なので外ではあの薄いワンピースを着なくてはならない。

私は自作ワンピースを着ると、特にすることも無いのでベッドに入った。

シーツのような薄さを誇る上布団は寒さを素通しして、夜は眠りに

くい。

数時間くらいじっとしているが中々眠気は襲ってこず、仕方ないのでベッドから上体を起こした。

(…暇だし、せっかくなら魔方陣を覗きに行こう)

私はこっそりと部屋を抜け出して、部屋着のまま神殿へと向かった。夜なので部屋に常備してあるランタンを持っている。

神殿に着くと、裏口を開けて中へと入る。

神殿の中は静まり返っていて、少々不気味に感じる。

(えーと、魔方陣発見！)

ランタンの光で僅かに見えた魔法陣の側に駆け寄る。

しゃがみこんでランタンの光を魔法陣全体に当てて見てみる。

魔方陣は何度見ても飽きないような惚れ惚れとした出来で、見入ってしまう。

しかし、そこである事に気づく。

(これ……束縛と追跡の他に人体強化と魔法能力付加も組み込まれてる…。どっちも禁術…、それを大勢の中でやるなんて大胆にも程がある。けどこんな小さいんじゃ誰も気づかないね。カモフラージュのために祝福の術式を大きくしてるのか)

人の体は普段脳の活動を16%ほどに抑えているが、それを無理に外して脳の活動を60%にまで上げる人体強化に魔法を行使できるように膨大な情報量を脳に送り込む魔法能力付加。

どちらも人体を破壊しうる危険な魔法。

しかもそれに気づかれないように祝福で痛みや違和感を消している。用意周到。恐ろしいね、この国は。

勇者本人を化け物に仕立て上げた。

（おいおい…嘘でしょうに。よりによってこれも組み込んだのか…
『^{ドラゴレイク}竜化』。人を何だと思ってるの…）

竜は古代から世界の支配者と呼ばれる種族。固き鱗は刃を通さず、大空を自由に駆け巡る翼と火を吐く息吹は正に王たる風格を漂わせる。

そんな竜に憧れ、人が開発したのは人を竜にすることが出来る竜の血を使った『竜化』。

けれど、人ごときが竜の力に耐えられる訳も無く大抵は力に負けて死ぬ。

勇者は知らず知らず体のリミッターを外されてるから耐えているのかも知れないが長くは持たない。

確実に勇者は死んでしまうだろう。

私は流石に危険だと感じ、勇者にせめてこの事だけでも伝えてやろうと立ち上がった。

その時、カツンと誰もいない筈の神殿から足音が鳴り響く。私ではない。

「そこで何をしているんだ？リン||ヒョード」

フルネームを唐突に呼ばれ、体が固く強張る。

聞き慣れた声だった。いやいや、まさかあの人がここにいる訳ない。今は深夜だよ？

「…あゝ、どうして貴方様がこちらへ…」

振り返って嘆息をつく。

見慣れてしまったその顔は出来れば今は見たくありませんでした。

――――師匠、ガウス。

「帰って来たらどっかの馬鹿が神殿に入っていくのを見たからな」

「ほんっと気配消すの好きですね」

「ふん、で？何してる」

「…勉強？」

「勉強か、感心だな。場所がここでなければ」

「あ……はは……」

「ははは。……ついて来い」

「…いえっさー」

引きずられて神殿を出ると、ガウスの部屋まで一直線。

ああ、今度こそ死刑宣告の予感。今度からしないで今回だけは勘弁して下さい。

「まったくお前は問題を起こすのが得意というか……。常識が無いのか？」

「失礼な！ありますよっ。まず…不正をやるなら出来ないように…とか！」

「どこが常識だ！非常識を堂々と胸を張って言うな！」

「どこが非常識ですか！我が家の家訓になんて言い草！！」

「家族自体常識が無いのか！？」

「にしても弟ってばいっつも家訓と正反対の事をするんですよ。どう思いますか？」

「弟は唯一の常識人か。お前は弟を見習え」

「家訓破りまくったら庭の木に吊るされるんですよ。弟はしょっちゅうです」

「なんて家だ」

珍しくガウスの取り乱す姿を見てしまった。ここに携帯電話があれば

ば今すぐ写メりたい。

そして全国に配送してやりたい。

「まあいい、いや良くないが。実はな娘に嫌いと言われた」

「限りなくどうでもいいです」

「聞け。衝撃が走った、愛してやまないそして可愛すぎて目に入っても痛くない程の娘に嫌いだと言われた。これ以上の悲しみがあると思うか？」

「そこら辺にごろごろありますよ」

「いや、無いだろう。それを聞いた瞬間、私は4階の窓から落ちて頭から打った」

「何で傷が無いんでしょうか？」

「それはホラあれだ……。とにかく私は今とてつもなく死にたい」

「じゃあ死ねばいいんじゃないですか。ナイフ持ってますよ」

「けどここで死ねばもう二度と娘には会えないんだ……うおおおおお
おおお!!」

「良い大人が泣かないで下さいよ」

「これが泣かずにいられるかああああああ!!」

「じゃあ泣いていて下さい。私が死刑宣告かと思って身構えていた娘話を延々と……。失礼しましたー」

私はガウスの部屋の扉を開けて深々とお辞儀をする。

その時、ガウスから真剣味を帯びた声がかかる。

「…魔方陣。勇者には伝えてやるなよ、余りにも酷だ」

私は机に突っ伏しているガウスから漏れた声に二言返事で返した。

それから自分の部屋に戻り、今度こそと思ってベッドに入った。

寒さを噛み締めながら私は眠りについた――

―――――と思ったらいきなり活動開始の鐘の音が鳴り響

いた。

まさかと思い、ベッドから跳ね起きると部屋の刻量を見る。
刻量の指す時間を日本時間にする、朝の6時。活動時間だった。

(一睡もしてない――――！！)

冬のためにまだ6時は陽が昇っていない時間帯なので油断していた。
私は悲しみを抱きながら服を着替えて再びガウスの部屋へ行った。
中に入るとガウスが嫌な笑いを浮かべながら待っていた。

(分かってて言わなかったのか……！この悪魔め……)

目の前のドSを睨みつけると逆に睨み返された。こっわ！！

「よく眠れたのか？」

「それ、分かってて言ってますよね。人の悲しみを何だと思ってるんですか」

「快感？」

「うわーお。見事なるドS発言。さっきの泣きは嘘ですか」

「馬鹿いうな。娘に嫌いと言われたんだぞ」

「さいですか。で、今日は何を？」

「今日は今から全員玉座の間に集合。勇者の事で」

「……はあ。分かりました」

私とガウスは朝食も無し状態で玉座の間と呼ばれる皇帝のいる場所に向かった。

ガウスの部屋から玉座の間までは歩いてすぐといった距離。

これはガウスが皇帝から信頼されていることを示している。

私達はもちろん玉座の間にも裏口から入ると、玉座へと続く赤い絨

毯の両端に整列して並ぶ。
待つのは皇帝と勇者の登場。

「皇帝陛下。並びに勇者様のご入場です」

どこからともなく放たれた言葉で玉座の間の扉がゆっくりと開く。
すると皇帝陛下とその隣に並ぶ昨日の勇者の登場。

皇帝陛下と勇者は美形だからヤバイほど絵になってしまう。すでに
この場の女性は全員見惚れている。

私以外。私は目の保養だになっていう感じかな。

皇帝は玉座に着き、勇者は絨毯の中央に佇む形となった。

「さて、勇者よ。名を聞かせてもらえるか？」

皇帝の威圧感満載の声にも顔色1つ変えずに勇者は答えた。

たちばな りゅうと
「橘劉斗」

「リュートが名前だな。本題だが、リュート。率直に問おう、この
国を救ってくれないか？」

「：俺にとっての利益はあるのか？」

「もちろん褒美はやるし、元の世界に帰す事も誓おう。後はこの世
界の財宝を持ってかえってもらって構わん」

「ふーん：分かった。引き受けてやる」

おいおいそれだけの条件で引き受けるなんて随分と軽いね。

「ただし、仲間をくれ。一人じゃきつそうだ」

「仲間なら初めからつける予定だったから決めてはいる。どれも精
鋭だ」

「へえ？」

「まずは騎士団副団長のアーリアに、神官長のクレア。それから魔法士のミリーと我が娘の皇女ラルアだ」

おお、物凄い精鋭の集まりだがハーレム化しそうだな。いや確実になるな。

勇者よ、頑張って醜い女の争いの餌となれ。

勇者の前に呼ばれた4人が前に出る。誰もが目も眩むような美人。しかしその中にミリーも混ざっていたのは少々驚いた。彼女は殿下と恋人だと思ってたし。

「この4人は我が国の誇る精鋭だ。不満はあるか？」

勇者は顎に手を当てて、黙りだす。

そして意を決したように言った。

「一人、仲間に入りたい者がいるんだがそいつは駄目か？」

緊迫感が広がった。勇者自ら引き入りたい人物、誰だろ？

「…誰だ？」

その場に静寂が訪れ、皇帝が固唾を呑む。

皇帝の言葉を受けた勇者は口元に笑いを含ませながら言った。

「昨日、俺を部屋まで案内した魔法士見習いのリン・ヒョードだ」

第二話：勇者は化け物（後書き）

良ければ感想をお願いします。

第三話：見習いは勇者の仲間になる（前書き）

少々短めです。

楽しんで頂けたら幸いです。

第三話：見習いは勇者の仲間になる

静寂————。それだけの言葉でしか言い表せられない程の静けさが皇帝の座る玉座の間に流れる。

この場にいる全員が口を開けて固まっている。皇帝は流石に口を開けてはいないが目を見開いている。

もちろん私も固まっている———はずだった。

なのに何で勇者が目の前で倒れていて、私は息を切らして勇者を見下ろしているのだろうか。

この状況を誰か説明して下さい。お願いします。

出来れば私の頭に浮かぶ最低の答えでないのを望んで。

「……また会えたのは嬉しいがいきなりすぎるご挨拶だな」

目の前で笑みを浮かべながら呟くように言った勇者に答えを聞いてみようか？

私にそんな勇気があるわけないね。

とゆうか聞かなくても分かっているのに認めたくなかったただだね。自分が————勇者を咄嗟にナイフで切りつけ

てしまったなんて。

いやあ、私自身驚きだね！

何言ってるんだこいつ——！みたいな感じで切り付けちゃったし。しかもほぼ無意識で。

よく元の世界の友達から言われてたっけ？

『凜って混乱すると人を攻撃する癖があるよね——。それって家柄？』

友達の言うことは信じるべきだったみたいです。思いつきり流しました。

しかも家柄って。友達は私の家族をどんな風に見てたんだろう？

確かに我が家は少し一般家庭と比べて違う所もあるみたいですよ！
一般家庭では、両親に命を狙われるなんて事無いみたいですし。

じゃあ我が家は何なんだって話ですよ。友達曰く、常識を超えた家族らしいです。けど弟だけは別のあだ名があって、非常識の中の常識といわれてるみたいです。さっぱりな意味ですが。

さてさて、こちら辺で現実を見つめてみましょうか。

目の前、倒れた勇者。周り、全員固まってる。どう打開すべきか皆目見当がつかないね！

とりあえず言葉を発しようか。

「：え——、いきなり切りつけたりしてすみませんでした。痛みますか？まあ、痛まなかったらおかしいという問題なんですけどその辺は置いておいて本題に入りますと貴方何言ってくれちゃってるんですか、コノヤローとかいう訳ですよ」

とりあえずで発した言葉がおかしかったような気もしますが良しということ。

私の今の気持ちを3割は伝えられたはずだ。
残りの7割は精神衛生上良くないと思うので伏せておきます。

「簡単な話だ。俺はお前を仲間に入れたと思った。だからそれを言っただけだろうが」

「本人の許可無しですか。面白い方とは思ってましたがそこまで行くといっそウザイですね。私の名前は教えていないはずですがどこでお知りにな？」

「聞いた」

「あはは。個人情報を出したのはどこの誰でしょうかねえ？師匠！！」

私は皇帝の面前にも関わらず、勇者に詰め寄る。

いやこうなったらもう引けないじゃん。引いたところで痛い視線バリバリだよ。

今、もう受けてるけどね！痛い視線を！！特にハーレム要員確定のお姉さま方から！

私はこっち来てから何度も痛い視線なんか受けてるからその程度どうって事無いけどね！

嘘だけど、めっちゃ痛いけど！！

今は無視してガウスだあ！！

情報を流すなんてあの人以外いない！あの人以外ありえない！！

私はさっきまでガウスのいたであろう場所をみるがない！！逃げたぞ、あの人。

「どこ消えたあ、師匠！！出てこないと娘さんにある事無い事、無い事中心に嘘八百並べ立てますよ！！」

『それはやめろ、頼むからやめろ』

部屋全体にガウスの声が響いた。

魔法を使っているようで場所の特定が出来ない。

しかし娘さんの事を言ったので無視を決め込む事は出来なかったようだ。

何を隠そう、ガウスの娘さんは何かと私に優しくしてくれて妹のように思ってくれてるらしい。

だから私の言うことを大抵は信じてくれるのだ。

「いつ何で勇者に私の個人情報流したんですか？私の驚く顔が見たかったとか抜かしやがったら二度と娘さんと会えないようにします」

『悪かったからとりあえず落ち着け。ここは皇帝のいる場だぞ？場所を変えろ。陛下、申し訳ありませんが勇者をお貸し願えませんか？正式な発表はまた日を改めてからお願いします。今は馬鹿弟子を

落ち着かせたいので』

皇帝が戸惑うように返事を返すと、ガウスから場所移動を告げられた。

場所は、勇者に与えられた国賓専用の部屋。

普段なら入ることすら戸惑う部屋に今回は混乱してるために戸惑うどころか蹴り開けて入る。

後ろから付いてきていた勇者はそんな私の行動に驚くことなくむしろ笑いを浮かべて部屋に入った。

「師匠、会えて嬉しいですよ。さて、理由を聞かせてもらいましょう」

部屋の中では中央のテーブルに座っているガウスがいた。

私はガウスに詰め寄った。

今は豪華な内装や小物なんて目に入らない！—————あの壺売ったらいくらだ？

「だから落ち着け、確かに悪いとは思った」

「何秒くらい？」

「2秒ほどだ。しかし今はそんなことよりも話す事があるだろうが」

「……確かにそうですね。とりあえずは娘さんに師匠が浮気中と話しておきます」

「やめてくれ。娘と妻が逃げる」

「一生冷や飯ですね。ざまーみろです」

「いつもに増して毒舌が凄いのは気のせいでは無いようだ。それよりも、だ！本題に入らせろ」

ガウスが私の頭を軽く小突いた。

骨がゴツゴツしてるので地味に痛い。

浮気嫌いの一途な美人奥さんとお母さんっ子の娘さんはこの人には勿体無い。

ガウスは魔法でお茶を入れると、勇者と私に座るように言った。私の前にだけお茶が無い事はきっかり娘さんに告げ口させて頂きます。

「あー、で本題なんだが：勇者よ。そこは説明頼む」

「だからこいつを仲間に入れて行きたいと言ったんだ」

「そりゃまた何でこいつなんだ？セーヴル大公国の精鋭じゃ不満か？」

「不満なんてたくさんあるが、昨日会ったときに思った。こいつは私情を挟まずに物事を見られるタイプだな、余計な偏見を持ってそうな精鋭よりかは大分マシだ」

そんだけの理由で私を肉食獣の檻の中に放り込むつもりか。
お姉さま方

こんな事になるならもう少しこの国を思ってるような口ぶりにするんだった、過去に戻って私を殴りたい。青いネコさんの持つてるピンク色の乗り物が天から降って来ないかな？

「まあ、確かに精鋭共は偏見を持ってるが腕は確かだぞ？」

「腕だけなら傭兵でも良い。俺は感情に流されない奴が欲しいんだ」
「こいつはしょっちゅう流されてるが？」

「戦闘では冷徹に物事をこなすタイプだと見た」

「あ、それはあながち間違ってる。無駄に冷静に俺を殺りに来るからな」

「だろ？だから欲しいんだ」

「けど体裁つてもものもあるからな。勇者の仲間には魔法士も入ってる、魔法士を二人も。しかも見習いじゃキツイ」

「じゃあ魔法士の精鋭はいらない」

「おいおい、陛下の事も考えてくれ。そんな事されたら陛下も魔法

士の女も名誉丸潰れだ」

「じゃあ二人でいい」

何故だ？本人を置いて話を進められている。

私は一度もこの間喋っていないよ、入られる雰囲気ほぼゼロに近いです。

さっきからテーブルの上にあるお菓子を頬張ってます。

さすが国賓専用の部屋なのでお菓子も最高級品です。ほとんどお菓子を食べにきたようなもんですね、これ。

「分かった…、陛下からは伝えておくが本人の許可は？」

「無許可だ」

「分かった分かった。リンは勇者パーティに加盟な」

「って待て、師匠。無許可ってんでしょうが」

「おお、リン。良かったな、勇者の仲間なんて名誉だぞ？」

「黙ってください。私は嫌です」

「何でだ？」

旅になんて出れば元の世界に帰る方法を探せなくなっちゃうじゃないですか。それに何より勇者と関わりたくありません、この人、気のせいか昨日とキャラ違いますよ。と言いたいのに言えないのは悲しきかな。

理由は本意でなくても作ってしまえばいいか。

「師匠と離れたくな……」

「理由がお前の性格的にありえない」

「チッ」

これはやはりベタ過ぎたか。最後まで言わせてすら貰えないとは。ならば次はどうしようか。

「リン、せっかくの機会だし世界を見て廻ってきたらどうだ？ お前は世界を見たこと無いだろう？」

「師匠：」

聞こえは弟子思いの良い師匠。

が、私には分かる。この言葉に隠された本当の意味を！

『いいから行けつつってんだろ。そして常識を学んで来い』
という風に。

常識を学んで来いとは失礼な、私は家族に常識を褒められた程だぞ。弟には軽蔑された事しか無いが。

「けど：私はまだ未熟です。勇者様の足手纏いとなってしまいますから私はここで勇者様を見守るだけにしたいと思います」

「リン：」

ふ、どうですか。ガウスよ。

勇者思いの良い弟子でしょう？

本意では『絶対ここに留まる。私の帰る方法探しの邪魔はさせん！』
てな感じですが。

ガウスも言葉の意味を前半のみ汲み取ったのでしよう。若干睨んできてます。

「未熟でも良いから仲間になれ」

勇者の横槍。黙ってなさい、一応こっちは異世界での先輩ですよ。

「拒否権を発ど……」

「お前に拒否権は無いと思うが？」

「こっちだって嫌なものは嫌と言える位の権利はありますよ」

「皇帝と話している時に聞いたが勇者の命令は絶対だと聞いた」

何言ってる、皇帝め。

勇者が権力行使で来るとは。昨日はお人好しタイプの勇者かと思っていたが全然違った。

こいつ、ドSだ。しかも物事を計算して見る奴だ。一番食えない奴だったとは誤ったな。

「今なら打ち首覚悟で皇帝を暗殺できる気分です」

「落ち着け、リン。勇者の命令を聞け」

援護射撃でガウスが撃ってきやがった。

ここを回避するために選ぶ選択肢は最もな理由を付けることだ。

「：いいですか？ 私はこれでもか弱い女の子です」

「どこがだ」

「黙らっしゃい、師匠。……つまり、魔族と戦うのは恐ろしいんです！」

い、言い切った！

よし、これで勇者に付いていく事は出来ないという最もな理由になる。

これでも女子だって事を思い出して良かった。

「俺が守ってやる」

はい、今誰だ。凄いかっこいい言葉が聞こえたけど今は一番聞きたくない。

聞こえない聞こえない。

「戦うのが怖いなら戦わなくていい。ただ付いてくるだけでいいから仲間になってくれ」

勇者と目が合う。

甘い声に切なげな顔。女子なら誰しものが頬を赤らめる場面。私も胸の鼓動が高まる。

「勇者様…」

「頼む…」

ドラマならここで甘く蕩けるような音楽が流れ始める。

しかし私は希望しよう、ここは恐怖を味わうときに流れる音楽を！
だって、勇者怖い！

甘い言葉囁いてるけどこれ逃げ場無くしてきた！

もう八方塞がって、完璧に逃げ場を埋められた。現に今だって何か黒いオーラ出してる！！

やばいぞ、これは。

ここはもうリアルに国外逃亡しかないか？

有休をとって勇者が国内から消えるまで国外で生活しよう、うんそれしかない。

「良かったな、リン。これで安心だ。陛下には伝えておくからな、心置きなく討伐に行つて来い」

撃沈。

陛下に伝えられれば行かざるを得なくなる。

もう、私に逃げ場は無いということか。DSの二人を相手に勝とうとした私が愚かだったようだ。

初めから選択肢なんて1つだけだったということか。

けど、最後に言わせてください。

第三話：見習いは勇者の仲間になる（後書き）

勇者はキャラがまだ謎です。

とゆうか勇者っぽくない勇者ですね。

感想お待ちします。

第四話：勇者と見習いの手合わせ（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！

第四話：勇者と見習いの手合わせ

「ちょっと貴方。お時間を頂けないかしら？」

「……………えっと、どうゆう状況ですか。これは。

あの後、私は逃げるようにしてあの部屋を出ました。

そしてあわよくば皇帝に伝えられる前に国外逃亡なんて考えも抱いてましたよ。

なのに勇者でも師匠でも無い第三者…………ハーレム要員確定のお姉さま方に捕まるとは。

全員美形だからこの状況で無ければわーいとか思えたけど思える状況じゃないです。

とゆうか何故私はこの人達に絡まれているのだろうか。

「あ…………、忙しい身ですので手短にお願いします」

顔が引きつるのが分かる。

けど笑顔は忘れない、笑顔さえしとけば大丈夫！多分。

「大丈夫よ。用件は1つだけなの。あのね、悪いことは言わないから勇者様のお話をお断りしなさい。貴方みたいな見習いが勇者様のお仲間になってなったら勇者様の品位が落ちてしまうわ。痛い目に遭いたくなければ引くことね」

あ、正論。

私も断りたいですよ？けどあの勇者話聞かないんです。

出来れば直接向こうに直談判を。

既に一目惚れな感じのハーレム要員のお姉さま方。

「分かりました。丁重にお断りをしておきます」

「物分りのいい子ね、嫌いじゃないわ。じゃあそうしておきなさい」

お姉さま方が高笑いをしながら去っていくと、頼もしい味方が付いたので私は再び直談判をしようと部屋に戻る。

これで私は自由だ！

ハーレム最高だよ、ナイスハーレム！

「勇者様あ！先程のお話ですが…」

私は勢いよく扉を開けると、その場で固まった。

「やっと話を受ける気になってくれたんですね。私はとても嬉しいですよ」

目の前で優雅に佇む金髪の美形は誰だろうか、部屋を間違えた？

「あ、すみません。間違えました」

私はぎこちなく一礼をして部屋を出ようとしたが、腕を掴まれた。

「間違えじゃねーよ。俺が勇者だ」

掴んだのは金髪の美形男。先程の笑みとは一転して不機嫌そうな顔がある。はて、いつの間に勇者が変わった？

奥を見ればガウスがにやにやしながらこちらを見つめている、なるほど貴方の仕業ですか。

「どうだ、勇者っぽくなっただろ？金髪に染めて口調も変えれば良い感じだ」

「元々金髪にはしてみたかったから良い感じだ。あとは演技だが得意だから問題はないな」

「味方は付けて損はない。どうせなら本性は隠した方がやりやすいだろう?」

「そうだな。お前らにはばれているが問題ないだろう」

勇者はどうやら心の奥まで真っ黒のようだ。

この国の人全員を騙すつもりか、ドS勇者め。

それにしても金髪はかっこいいな、美形が更に映えて目の保養度倍増だ。

「本性が真っ黒なのを隠して魔族討伐するつもりですか。ある意味魔族よりも真っ黒の貴方に倒される魔族が可哀想です」

「じゃあその可哀想な魔族を守ってやる為にも俺と付いてきた方がいいんじゃないか?」

「くッ…。逆手に…」

「もうお前の同行は決定事項だから諦めろ」

「ふっ…。最後まで諦めないのが私という人間です」

「俺も妥協はしない」

勇者との間に火花が散る。

今なら気合で目からビーム出せるかな?あの綺麗な顔に穴を開けたいんだけど。

「しかし残念ですね、勇者様。私は貴方に付いていけないという理由を手に入れたのです」

「……………どんな?」

何故か部屋の温度が下がったあ———!原因目の前だ、勇者から冷気が出ている。

「そ、それは……他のお仲間がですね…」

「じゃあ無視しとけ。理由は却下、認めない」

だから最後まで言わせて下さいってば。

無視できる状況じゃ無かったんですから。

「まあ、リン。もう諦めろよ、もう分かってんだろぅが」

ガウスは黙ってくださいませんか？

「おとなしく着いてくだけで良いんだぞ。勇者の仲間なんて名誉だろ」

「メリットだけ押し付けけないで下さいよ。肝心なデメリットは伏せまくりですか？」

「デメリットなんて戦うことだけだろ。お前は強いし良いじゃないか？」

「何言ってくれてるんですか。この程度の力で強いなんて本気で言ってる訳じゃ無いですよね」

「……お前の言っている強いってどのくらいだ？」

「両親です、未だに勝てたことがありますから。いつも挑むと意識が堕ちてるんですよね」

「お目にかかりたくない両親だ」

ガウスが渴いた笑いを漏らす。

私の両親は昔から強くて憧れでもある存在。

私も二人のようになりたくて手合わせして貰ったこともいくつあるが、勝てる見込みが無い。

気づけば適当にあしらわれて意識が堕ちてる。

「とにかく、主張させて貰います。行きたくありません!!」

「主張が通らないことぐらい分かりきってるだろうが」

「痛いところを……。こうなったら国外逃亡でも……!」

「国内を出るには総務部省に申請してから3ヶ月後に可能だ。その時にはとつくに旅に行ってるだろ」

「だったら申請をせず……」

「捕まって一生幽閉か。短い間、楽しかった」

逃げ道が無い! 私はこのまま旅に行く?

私の夢にまで見る『帰る』ことが遠ざかってしまう。

早く帰って平凡ライフを楽しみたいと言うのに。

「そういえば勇者、出発はいつにする気だ?」

「当面は修行らしい。騎士団団長とかいう厳つい男が稽古をつけると言っていた」

「ああ、ウェルズか。あいつの訓練はきついらしいが確実に力はつくぞ」

「そうか」

修行かぁ。私もやったな。

いきなり来たのが草原、しかも魔物と呼ばれてる凶暴な獣の縄張りだったから死ぬかと思った。

草原を抜ける約1ヶ月間危険すぎる修行相手だった、いやもう死ぬってあれ。

草原に落ちてる細い木の棒で応戦してもすぐ折られるし、逃げても逃げても追ってくるし。

運よく魔物の死骸に出会って武器を作れたから良かったけど牙は駄目だね、べたべたしたから。

結局爪や骨を使って相手し続け、重傷を負ってこの国に駆け込んだのがつい昨日のことみたいだ。

長かった上に辛かった。よく生き延びたと思うよ。

国に着いて安堵してたところに追い討ちをかけたガウスの修行も辛かったけど死にはしないような修行だったからまだマシだった。いや、それでも十分辛かったけどね。

「そういえばリンも修行をしたな。不眠不休で4日間だったか？」

「そうですよ。スパルタ教官が」

「お前も修行？ どんなんだ？」

「まず魔法の成り立ちと理^{ことわり}の綴^{ずい}つてある書物の数百冊を読破、その間後ろで鬼が殺気を漏らして睨^{にら}んでいます。終われば頭に入ったのかを確認するためにテストを数十回以上受けさせられます。ちなみに1問、間違えるたびに剣が飛んできます。そしてその次は実践。やらなければ殺すぞの一言で初級魔法をマスターさせられました。師匠は見本とか言いつつ、初級魔法の連発を繰り返して爆音を轟かせ私の眠気を覚まし疲労を蓄積させました。それが4日間に詰めこめられ、5日目からは下っ端としての通常業務開始……といった感じです」

「聞いた俺が悪かった」

「そうですね。海よりも深く反省してください」

「リン、とりあえず顔が怖いからやめろ」

「誰のせいだと思ってるんですか、師匠」

ついつい長く語ってしまいました。

勇者は少し口元を引き攣^{くわ}らせて、ガウスは無表情でした。

ガウスは頼むから表情を変えろ、犯人お前だから。

「悪いとは思ってない、おかげで初級魔法をたったの4日でマスターできただろ」

「そこは感謝してます」

「急に素直になれるのも不気味だな」

「怒っていいですか？」

「冗談だ。とにかく今後だが、勇者が修行を終えるまでお前は荷造りしとけ。逆らったり逃げたりしたら……分かってるな？」

目の前に魔族よりも怖そうな男がいるぞ。

もう私に拒否権は無いと。そうですか。

私の人権は何処に消えたんでしょうかね、こちらに来たときから人権無視ですが。

「ッ分かりましたよ！！付いてけばいいんでしょうが！」

「勇者、了承得たぞ」

「いい性格してるな、あんた」

「この最低師匠が————！」

私はガウスに怒りをぶつけるがガウスは無視を決め込む。

嵌められたなんて家族に知られたらボコボコにされてたな。

ここが異世界でよかったなんて思ってしまう。帰りたいのに。

「なあ、提案があるんだが」

勇者が唐突に切り出し始める。

顎に手を当てながら言い出すその顔が不敵な笑みを浮かべるので嫌な予感がよぎる。

「手合わせしてくれないか」

「……………は？」

思わず素っ頓狂な声が出てしまった。

いきなり何を言い出すんだ、勇者よ。目線が私という事は私に言ってるんですか？

構わないけど何故そんな事をいきなり言い出したのか分からないです。

「…なんで？」

「自分の力量が知りたい。一応元の世界で剣術を習ってはいたが、こちらでも通用するのか分からないからな。お前は中々なレベルなんだろう？」

「それ、私にぶちのめされろって言ってるようなものですよね」

「何でだ、勇者が最初から強いと決まっているわけではないだろ」

「いや、剣術ってだけでも強いのに更に…アレですから」

「アレ？」

「何でもないです。忘れてください、忘れろ」

つい失言してしまい、口を押える。

剣術習ってる人に召喚魔方阵の魔法が上乘せされたらどんな化け物になっているのか分からない。

負ける戦はしないタイプです。

勇者は眉を潜めたがそれは一瞬の事ですぐに無表情に戻った。

「ふー…ん。で、受けてくれるか？」

「…お断りしたいですが師匠の視線が突き刺さるのでお受けします」

勇者の隣に佇むあの男が怖いです。

視線だけで人を殺せる能力を持っているに違いない。

「じゃあ訓練場を貸して貰うといい。勇者が使うと言えば、すぐ使わせて貰える」

「今からですか!？」

「今以外にいつがあるんだ。ほら、とっとと行くぞ。……負けたら殺すからな」

「物騒すぎる言葉が小声で聞こえたんですが」

「気のせいじゃないから安心しろ」

「安心できるのは頭がおかしい人だけです」

と言う事で、訓練場に行くことなり部屋を出ました。

足取りがとても重いのは気のせいじゃない。

知らずに大きな溜め息が漏れる。ああ、幸せが逃げていく。

「あ、勇者様だわ」

歩く廊下ですれ違う女官やメイドが勇者を見て頬を赤らめる。金髪に変わってるのに勇者と見破られるなんてすごいなと思っていたら、ガウスに勇者は髪の色を金色に染めるしきりがあるのだと聞いた。どんなしきりだ、それ。

勇者もそれに対して笑顔で返す。その笑顔に黒いオーラが一切見受けられない。

本当にこの国ごと騙す気か、勇者。

「着いたぞ、ここだ」

ガウスが足を止めた先にあるのは土煙の舞う闘技場のような所。

ここがさっき言っていた訓練場のようで、中央の所に剣を振る男の人達が見える。

「おい、ウェルズ！勇者を連れてきた！」

ガウスが叫ぶと、中央で剣を振っていた内の一人がこちらを向いて走ってきた。

ガウスよりかは若そうな風貌を持つ中年の男の人で、強面だった。

「おお、そうか。修行を受けに？」

「それもあるんだが、まずは私の弟子と戦わせてやってくれ。勇者の希望だ」

「弟子？……この可愛らしいお嬢さんの事か？」

「ああ」

「初めまして。ウエルズだ」

「リンです。師匠にやらないと殺されるので使わせて頂いていいですか？」

「構わない。使ってくれ」

「どうもです」

ウエルズがニツコリと人の良い笑みを浮かべる。

それから中央で練習する男の人達をどけて貰い、勇者と手合わせをする形となった。

それにしても展開が早い。

出会って翌日で勇者と勝負、これ何フラグ？

そもそも勇者と言ったら騎士団団長と戦って負かして強いってことを見せ付けさせるフラグが有効なはずなのに何ですか、この展開は。憂鬱感が半端ない。今すぐ逃げ出したい。

第一、勇者が一介の下っ端を相手にして勝って嬉しいんですか？

ガウスもガウスだ。か弱い弟子を勇者の前に放り出すなんて酷すぎるだろう。

「1つ聞きたいんですが」

「何だ？」

「制限時間3分でどうですか？」

「分かった、参ったと言わせればいいんだな？」

「武器破壊でもいいですけどね」

私は持たされた木刀を見つめる。

この勝負、負けたら殺される、ガウスに。

つまり、負けることは出来ない。けど勇者相手に勝てる筈も無い。何これ、私にどうしろと言うんだ。

私に残された道は引き分けのみ、3分——耐え切るしかない！

私は目の前の勇者に木刀を構え、見つめると勇者が顔を背けた。

いや、何故そこで背ける？

「じゃあ、行く……」

「勇者様ッ！！？」

勇者と私がある場で突然の声に驚き、固まる。

今の声は訓練場の奥の方から響いた。

私は動こうとした体勢で固まったので若干姿勢がキツイ。

それにしても誰だろうか、女の人の声だったみたいだけど。

視線を変えてみると訓練場の奥で綺麗な女の人が剣を持って口を開けていた。

あれは——ハーレム要員の騎士団副団長であるアーリアさんだ。切れ長の赤い瞳に燃え盛るような赤いさらさらの髪の毛が人気の美女で、剣の腕が天才的と言われ若くして副団長を務める人。

騎士団の中では唯一の華で、憧れの的なそう。

そんな彼女が焦ったように勇者の方に駆け寄り心配そうな顔を浮かべている。

うん、勇者と彼女は端から見ればバッチリお似合いなカップルだね。

「何をしていらっしゃるんです！？勇者様が何故このような所へ——？」

「あ、少し……自分の力量を知りたいと思ったのですが……いけませんでしたか……？」

今だけ勇者に尊敬の念を抱きました。

いきなりのことに動じず演技に笑顔、どこぞの詐欺師か。

演技が本性と違いすぎて鳥肌が立つ。断言しよう、勇者は一流の俳優になれます。

「いえ、そのようなことは……。けれど何故この者と？他にもマシな相手がいたかとは思いますが」

私とアーリアは一度廊下で会っている。

会話こそはしていないが睨む力だけは以上に凄かった。言動と行動から勇者に一目惚れですか。恋愛に興味の無い鉄の女といった噂は嘘？

「いえ、私から頼んだのですよ。彼女は快くも引き受けてくださったので」

勇者は笑顔を崩さないまま、答える。

1つ訂正をお願いします。快くありません、嫌々です。

そして勇者とアーリアさんで二人のワールドを展開しないで下さい。私、空気化してます。

この場から抜け出したいのに抜け出せないこの気持ちを察しろ。日本人はこうゆうプレッシャーに人一倍弱いんだぞ。

「けれどこの者では勇者様と対戦させるのは失礼に当たってしまいます。どうか、やるならば私と対戦してくださいませんか？私ならば副団長を務めておりますのでまだ相手になって差し上げられるかと……」

「でも、私は……」

「お願いします。一度だけでいいのです」

「いえ、それでも……」

「私ではやはり戦力には欠かしますか？」

「そういう訳ではなくて…」

「ならば致しましょう！おい、木刀を貸せ」

私の手元にあった木刀がアーリアに渡る。奪うように取られたので不覚にもよろめいてしまった。

その時勇者がこちらを見て驚いたような顔をしたがまあ当たり前でしょう。

いきなり副団長との戦いにシフトチェンジしたんですから。私は助かったんで嬉しい事この上ありません。

アーリアの言動にツツコミたい事がいくつかありましたが。

勇者、頑張れ！仲間との初対戦ですよ。

私は内心ウキウキしながらその場を離れてガウス達のいる観覧席へと向かった。

訓練場は屋根の無いドームのような造りをしているので観覧席がちゃんと存在する。

私は訓練場の奥にある階段で観覧席のある2階へと昇り、ガウス達に会う。

「師匠！と言うことで今回の対戦は無しです」

「チッ。仕方ないか…。じゃあ座って見てろ。勇者と騎士団女との対戦か、悪くない組み合わせだがつまらなくなったな」

「つまらなくなった？むしろ楽しくなるのでは？」

「……………はあ」

「なんですか、その溜め息。地味にダメージですよ？」

「いいから座ってろ……………ったく」

「はーい」

私は観覧席に着いて、下にいる勇者を見下ろす。

勇者とアーリアが何かを話しているらしいが声は聞こえない。

話がついたのか二人のが離れてお互い木刀を構え始めた。

さて、勇者はどれ程の強さなんでしょうかね。出来れば人間内である事を希望して。

第四話：勇者と見習いの手合わせ（後書き）

色々な展開をすっ飛ばしてるような気がしますけどどうか温かい目で見守ってください……。

第五話：勇者の仲間（前書き）

勇者の仲間がやっと全員出てきました。

第五話：勇者の仲間

本日は冬とは思えない程の暑さが照りつける。

降り注ぐ陽光が暑さのみを運び、体が少し汗ばむ。

炎天下とはいっても過言ではないこの暑さの中で、金属音が鳴り響く。

不快感を思わせるような音だが、私はこの音がどちらかと言えば好きである。

金属音を鳴り散らかすのは訓練場の中央で向かい合う勇者と騎士団副団長の肩書きを持つ勇者の仲間。——もといハーレム要員。

剣の打ち合いを見続けてもうすぐで3分を切るが決着はまだ着かない。

着かない——というか着けない。

圧倒的に勇者の方が剣技や能力は上なのだが、決着を着けようとはせずに只打ち合いを続けている。

一方でアーリアはもう疲労困憊しており、打ち合いを続けるのがやっつと言った感じである。

そしてそんな戦いを見続けている私が思った事は、騎士団団長が怖いという事です。

副団長のあまりにも情けない姿に観覧席に座る団長がお怒りのご様子でさつきから顔が怖い。

ただでさえ強面で怖い顔がさらに迫力を増してもはや鬼と化している。

（ウェルズさん怖あ……。もう人一人殺^ヤってるようなオーラが出てるよ……）

私は勇者の試合よりも団長の顔の怖さに意識が持っていかれていた。その時に大きな笛の音が鳴り響く。

どうやら勇者の試合が時間切れで終わったようである。

それと同時に団長が観覧席から立ち上がり、ゆっくりと階段を下りていった。

私とガウスも下へ降りて勇者のいる中央まで足を進めた。

「馬鹿者！お前は副団長という役職に就きながら何という体たらくだ！！勇者様に勝てない事は十も承知の上だとしても良い勝負すらも行えんのか！！」

団長がアーリアさんに怒鳴りつける声が響いていた。

アーリアさんは顔を伏せ、じっと動かずに聞いている。

「まあ、ウエルズ。そこまで怒らずともいいだろう」

「良い訳があるか！ガウス！貴様の弟子であればもっと良い試合を行えたのであろう！？」

「え……あ——どうだろうか？」

「渋らずとも良い。それを取った上に無様な戦いを見せてすまなかつた」

「いや、そこまで……」

私が物凄い団長に過大評価されてる。

評価されるのは嬉しいけど身の丈にすぎる評価は有難くないのでやめて貰えますか？

あ、ホラ。アーリアさんがこっちを睨んでくるんですって。かなりの眼力で。

「すまないが勇者様。修行は明日にして頂けませんか？こっちの馬鹿を修行し直さなければ勇者様の仲間とはいえません。失礼します」
「別に構いませんよ。では」

勇者が最後まで笑顔で団長が去るのを見送ると一気に顔が無表情へと変わった。

演技終了。

「自分の力量を測ろうにも測ることができなかったな、あの女の実力は分かったが」

「勇者の仲間としては少し力量が足りなかったか？」

「まあな。さて、今度こそ相手をして貰おうか？————リン＝ヒョード」

「断らせて頂きます。副団長ですら勝てなかった相手を見習いがどう勝てと？」

「——お前ならいけると思うんだがな」

「どんだけ皆さん私を過大評価してるんですか、師匠の弟子だからですか」

私が言い放つと勇者とガウスが大きく溜め息をついた。
いや、溜め息をつきたいのはこっちなんです。

「ま、いいか。勇者、皇帝陛下のところへ行くぞ」

「……いきなり何だ？」

「いや、何か成り行きで忘れてたけどリンを落ち着かせる名目で皇帝の間を退席しているんだぞ。戻らなきゃやばいだろうが」

「そういえば忘れていました。ナイフで切りつけて出てきてしまっただけでした」

「お前はいつもいきなりの行動だからな。あれでよく不敬罪にならなかった」

「いやあ、無意識で体が動いてて……」

「その反応が怖いな」

という事で城の中を進み、黄色い声が上がつつ玉座の間の正扉の

前に辿り着いた。

ここに来るまで勇者が女の人達に囲まれて足止めをくらったので大変だった。本来なら3分もかからなかったような道が20分もかかったとはどういうことだ、イリリュージョン？

さて、扉前まで来たのは良いけれど入りにくい。

だって下っ端が正扉からですよ！何様って話なわけですよ。

けど裏扉からは入れません。こそこそ入って皇帝へのご挨拶は出来ない上に不敬罪で打ち首確定になってしまいます。

ガウスが指を動かして金の装飾で造られている重そうな正扉を魔法で開けて行く。

（そもそも皇帝の前なんかに一介の下っ端！絶対おかしいって！！私はどこで選択肢を間違えてこうなってしまったんだよ！）

心の中での葛藤を繰り広げながらも目の前の扉はゆっくりと開いていきます。

分かりました。この世界は私を苦しめたいんですね、受けてたってやりますよ。

扉が完全に開き、中に入ることを余儀なくされると勇者とガウスの後に続いて私も中に入る。

赤い絨毯の先には玉座に優雅に佇む皇帝が。

私達は玉座の前にまで歩いていくが、その間皇帝の側に控える重臣達の視線がめっちゃ痛かった。

今この玉座の間にいるのは皇帝と重臣達だけみたいだった。

玉座前にまで来ると膝を折った。

「……リン＝ヒョードだったな」

皇帝が開口一番に発したのが私の名前だったので心臓が跳ねた。

「落ち着いたか？」

「……………え？あ…はい…………」

皇帝の予想もしていなかった言葉に一瞬固まってしまった。

勇者を切りつけた事や何で私が仲間となるのかを聞かれると思っていたので少し拍子抜けしてしまった。

予想が外れたのは嬉しいから良いのだけれど。

「ならば良い。…して勇者、何故この者を仲間にな？」

「…………理由はある事にはあるのですが、話す気はございません」

勇者が爽やかな笑顔で言っただけ。

「…そうか。仲間の件はいいのだが話したいことは今後の事についてだ」

「今後…とは？」

「まずは勇者の修行は良いとして、その前に勇者の仲間と自己紹介だけでもやって欲しい」

「そういえば騎士団副団長とお会いしましたよ」

「そうか。ならばそちらはいいな。後は神官長のクレアと魔法士のミリー、我が娘のラルアだ」

「そうですか。近いうちにお会いしたいですね」

「その憂いは必要ない。この3人は既に別室に集めてある。ここを出た左の客室だ」

「…………分かりました」

皇帝がそれだけを言い残して重臣達と去ると、勇者が舌打ちをした。

「……………って舌打ち！？」

「面倒くさいな。わざわざ会いに行けと言う事か」

「：待ってくださってるみたいですし、早く行った方が良いのでは？」

「他人事のように言ってるがお前も付いて来いよ」

「いえ、私は……」

「お前も仲間だからな」

勇者が不敵に笑う。

語尾が強調されたのは気のせいではないらしい。

「じゃあ私は帰る、そろそろ仕事に戻らんとヤバイ」

「え：ちょ、師匠！待ってくださいよ」

「しばらくは私の部屋に立ち入り禁止だ、リン」

「し、師匠――――！！」

「諦めろ、行くぞ」

去っていく薄情者の背中を見つめながら勇者に首根っこを掴まれて強制連行。

仲間と会う？会った瞬間かき氷が作れそうな予感がするほどの視線を受けますよ。

だって、勇者の仲間になることを断るって言ったんですよ！？

なのになんか流れて仲間になっちゃいました、テヘ。――――ってか！？

嫌だ、死亡グラフ！

私は逃れようと必死に体を動かして逃げようとするが勇者の引っ張る力が強くて抜け出せるに抜け出せない。

勇者はそんな私を見てただ微笑を浮かべるだけ。

かっこいいけど嫌味か！哀れな子羊を見てあざ笑いやがって！！

玉座の間を出てすぐ左の客室の前まで来ると、勇者はやっと私を放した。

首根っこを掴まれていたので少し咳き込む。

私は既に逃げ出せない状況まで来てしまった。ブリザードの視線を受けるまでタイムリミットはもう無い。

勇者が躊躇いも無く扉を開けて私も中に引きずりこまれる。

「初めまして、皆さん。挨拶が遅れましたが勇者として召喚された劉斗と言います」

中に入った勇者は眩し過ぎる笑顔で自己紹介を述べると日本文化の一つであるお辞儀をした。

お辞儀も優雅すぎて、分度器で測れば45度ピタシでは無いかと思うほどの完璧なお辞儀だった。

そんな勇者を中にいた仲間は見惚れていた。

頬を薔薇色に染めて瞳は甘くつぶらか。まさに恋する乙女そのものだった。

「あ、貴方が勇者…様…」

呟いたのは神に身を捧げ、純潔を貫き通す神官長のクレア。

白き巫女と呼ばれる彼女は、衣服を穢れの無い白で統一し金色に輝く髪と瞳はまるで女神だと言われている。

凛々しい顔付きは今ピンク色に染まっていて更に魅力を生んでいる。

「やっぱり…：…かっこいい…」

ふっくらとした赤い唇からその言葉を漏らしたミリー。

くるくる巻いてある茶色の髪に大きな紫色の瞳で可愛い系の顔立ちをしているミリーは性格が男のようなのが玉にキズと言う事らしいがそれでもギャップがあるからと求婚を絶えず受けているような子。同期と言う事で仲は良いほうだった。だからこそミリーの事を少しは知っている。

彼女の憧れは野性味の強い男らしい男なそうだったはずなのに正反對の勇者に一目惚れとは驚いた。

「……………はう…」

勇者の顔を見て守りたくなるようなよろつき方をする皇女ラルアは、140あるか無いかほどの小ささで華奢な体つきをする守りたくなる女の子。

王族特有の銀色の髪に透明感を持つ白色の瞳は小顔に合い儚さを感じさせる。

王道には定番と言える皇女だった。

（これがハーレムを作ることのできる男の能力か！？）

一気に3人の美女を落とした勇者に尊敬の念を抱いた私は呆然としていた。

笑顔1つで女を落としてハーレムを作り上げるのが王道の勇者。この勇者は全く持って王道を突き進むらしい。

それを見ていかなければならない私はどうすればいいんだろう。

「よろしく願いますね」

首を少し傾げて言う勇者は計算でもしてるのか完璧だった。

可愛さを生み出しながら、それでいて男らしさを失うことの無い仕事草。

ハーレム3人はもうめろめろだった。

え、私？勇者の本性を知ってしまったので恋愛対象外ですよ。目の保養だとは思いますが美形はテレビの中でいいです。

「は、はい！あの……私は神官長を務めているクレア||トレイルと

申します。これからよろしくお願いしますね」

顔を真っ赤にしながらも平静を装おうと声音は冷静さを保つクレア。

「あ、俺はミリーって言う！よ、よろしくなッ」

気恥ずかしそうに言うミリーはいつもの調子じゃない。

「…私は……ラルアって言います。治療術が使えるので今回の同行を希望しました…。足手纏いにならないように頑張りますッ……」

もじもじしながら言うラルアは勇者の方を上目遣いで見つめ上げる。勇者は何気に身長が高くて、私も見上げなければならぬほどの大きさだけど上目遣いはやばいでしょ。

———そう思って見上げてみると勇者は私の視線から顔を逸らした。耳が赤い。

勇者め、さっそく王道の皇女との恋愛ストーリーを始める気か。

「では自己紹介も終えたので失礼します。……おい、行くぞ」

耳元で囁かれて驚く。

無駄に美声だから心臓に悪い。

「いや、私は何のために来たんですか。せめて自己紹介しますよ。あの、リン||ヒョードです。では」

腕を勇者に掴まれながらも一応自己紹介をする。

3人は勇者にずっと見惚れていて私の自己紹介など微塵も聞いていないようだったが。

ま、いいか。

私は成すがままに勇者に引っ張られて部屋の外へと出る。

（それにしても全員美人だったな。日本じゃ絶対にお目にかかれないね）

私は一人そんな事を考える。

「…面倒くさい挨拶は終えたし、部屋に戻るか」

「そうですか、ではさよならですね。お部屋への道はわかりますか？」

「は？ お前も来るんだよ」

「へ？ いやいや私は用事がありまして…」

「用事？」

「はい、日課で図書館へ」

「…ふーん。じゃあ俺も行く」

「何故…！…まあいいですが…」

毎日図書館へ通う理由は単純明快。

いざ、元の世界へ帰るため書物を読破している。

魔方陣から空想のジャンルまで幅広く読み漁り探しているものの有力となった情報は1つもない。

この国は別名『文明の塊』と呼ばれ、図書館にはそれを証明するかのごとく書物がある。

記録によれば図書館には約5000万冊もの蔵書があるらしい。

だからこそ可能性を信じて毎日通い詰めているのだ。

図書館は城の中にあり、行く事が簡単なので通い詰められる原因にはそれも入っているが。

ガウスから暇も貰ったことですし、今日は読みふけるぞ！

っと思ったのはいいんですが、勇者がついてくると言い出すなんて予想外でしたね。

図書館に行って人が騒ぎ立てなければいいんですがその心配は要らないでしょうか？

人は滅多に居ないし、居ても静かな方ばかりですから。ただこの勇者が書物に興味があるとは少し意外でした。

外見をこの際詳しく説明させて頂くと、金色に輝く髪と正反對に鋭い瞳に染まる黒色が整った顔に映え、スタイルも少し引き締まっている感じでどちらかといえば運動系で文化系には見えない。――

――眼鏡を掛ければ別だと思うけれど。

基本見た目はクール系美少年だけど演技中は紳士になるとはどんな裏技なんだろうか。

とか考えてる内に図書館へ辿り着きました。

「こんにちは、リンです。新しい本がまた入ったと聞いたんですが……」

いつも通りに図書館の扉を開けて、中に居る人に声を掛ける。

「やあ、リンちゃん。入ってるよ、パッド先生の新作『未知の魔方阵』が」

人の良さそうな優しい笑顔を浮かべて出迎えてくれたのは図書館の管理員をしている通称『図書館の主^{ぬし}』。

図書館にある本で知らない本は無く、ずっとここで管理員をしている。

明るい亜麻色の髪と薄い水色の瞳は決して悪印象を抱かせない30代の男の人。

「本当ですか！？それ下さい！！」

「毎度あり、2000Lだよ」

「た、高い…。ここは…1000Lで！」

「しょうがないなあ、常連さんだから1800Lでいいよ」

「1500L!」

「1750L」

「…1600L」

「1700L」

「……分りました」

私は結局300Lしか値切れなかったことを悔やみながら1700Lを差し出す。

ん？普通は図書館なんだから借りるはずなのになんで値切って買ってるかって？

ここが地球とは違うところなんです。

こちらでは図書館は読めるところであって借りるところではないらしく、借りるには買わなければならないんです。

もちろん買ったんだから自分の物になりますが本を買わずに図書館から持ち出すことは禁止とされています。

ちなみに『L』とはお金の単位で『円』とあまり変わりません。100Lは100円といった感じですよ。

一応お城で働いてはいるので雀の涙ばかりのお金を貰ってます。

だから値切らないとリアルに餓死するのです。

私は受け取った本を抱きしめて早速読もうと席に向かおうとしますがそこで大事な事に気づきました。

勇者を忘れてました。

「ありがとうございます。あ、それと一応紹介しておきますね、こちら勇者様ですよ」

「へえ、リンちゃんが勇者の仲間になったって本当だったんだね」

「何故それを…」

「うん？ガウス様が場内に放送を……」

「あの師匠、絶対殺す」

「…………うん。それはまあともかく勇者様、リンちゃんのことお願
いしますね」

「……はい」

勇者の紹介を終えたことでガラガラの図書館内に数多くある席に着
いて本を読み始める。

本を読むだけなら買わなくてもいいのに買った理由は本の処分の速
さと図書館の開館時間の短さが原因となる。

毎日増え続ける蔵書のために新作であっても僅か3日で処分され
たり、開館時間が毎日2時間だけなのでとても買わなければ読むこ
とが出来ないのだ。

私はそんな理由で買わざるを得なかった本の1ページ目を開いた。

第五話：勇者の仲間（後書き）

勇者が旅に出るまで後数日？数十日？はたまた数ヶ月間か。
どちらにせよ魔族が修行終わるまで律儀に待ってくれるなんてあるはずが無いですよね♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9051y/>

同じ世界の勇者と見習い魔法士

2011年12月3日15時55分発行